

ピカソ



長谷川美貴

青山学院大学理工学部
[252-5258] 相模原市中央区淵野辺5-10-1
教授, 博士(理学).
専門は複合錯体の光化学.
hasemiki@chem.aoyama.ac.jp
www.chem.aoyama.ac.jp/Chem/ChemHP/inorg2/

高校時代の恩師である堀美三夫先生が本学の教職課程の非常勤講師に着任され、先日30年ぶりに講義を見学させていただく機会があった。本物趣向の講義を貫いていらっしゃる先生で、目の前でリズミカルに多種の実験をしてくださった。しかも化学を美しくみせることにもこだわりをもっていらっしゃる先生である。たとえば、試験管の中の硫化水銀の赤い粉末をブンバーナーで直接熱し、分解した物質から昇華法で水銀を分離する。しばらくすると試験管の底で粉末は真黒になり、数センチ上のところで銀色に輝く帯が浮き上がる。火からおろすと水銀の帯はそのまま、粉末はいつの間にか赤色に戻っていた。分解した硫黄が試験管の中でもう一度水銀と反応したのだろう。実験内容とともに発見の喜びに感動した。また、綿状のニトロセルロースをピンセットでひとつつまみし、バーナーの炎に近づけるとフワッと瞬時に燃えてなくなり、ニトロ基の燃焼性の効果を実感で掴むことができた。この日、5時間にわたり13種以上の実験を経験させていただいた。どれも洞察したくなる興味深い内容と演出である。画像だけでは伝わらない感動が満載であった。改めて、化学の道に進んだ喜びと原点を意識した。

筆者も研究のディスカッションに向かう際、伝えやすさのために秩序だった文章構成や図表の整頓をし、とくに図の作製では誰もが理解しやすい美しさを心がける。筆者らの研究は、希土類錯体の発光を扱っており、ユウロピウムやテルビウムを用いると赤色や緑色の鮮やかな発光を目の当たりにできる。何度みても美しいと思うし、自然の神秘に感動するので、新しい錯体ができると学生が呼びに来てくれる。すぐにUVランプで発光の様子を彼らと確認し、写真に収める。ときどき写真を眺めては嬉しくてにやにやしてしまう。今の筆者にとって、研究は趣味ではなく仕事である。そのような中でも、「この分子集合体を希土類で美しく発光させたいから」という理由で共同研究のテーマが

生まれたことがあった。人間が本来もつ探求心の大切さを証明するかのように、そのテーマは思いのほか美しく光る新物質に大変身した。周期表も美しさをもつ代表的な科学の例と言えるだろう。元素の並びは性質そのもので化学者を納得させる、芸術的な配列である。

美術館をめぐることが筆者の趣味の一つである。とくに、仕事で煮詰まったときには鎮静効果がある。言葉がない世界で、絵画や彫刻はわれわれに訴えてくる。そのときの体調や気分で感じ方も異なるので、バロメータのように思うこともある。とくに好きな作品は、ピカソの『ゲルニカ』である。『ゲルニカ』が完成するまでの習作を集めた展示が20年程前に日本であり、たちまちファンになった。そのとき、『ゲルニカ』は来日しなかったもので、本物にいつか会いたいと痛切に思った。それから数年後、マドリッドに立ち寄ることになった。ついに『ゲルニカ』と対面したのである。大きな絵が一枚だけ飾られた白い部屋に筆者しかいない。写真からでは得られない深い悲しみと平和への強い意思が全面から伝わってくる。日本での展覧会や絵画集から『ゲルニカ』に対するピカソの思いを予習していたはずなのに、蘊蓄は不要だった。目の前に立っただけで、なぜピカソがこの絵を描きたかったのか、直球で伝わってきた。熱い思いがこみ上げ、泣きながら眺めていた。ピカソは人と人が争うことを必死に止めたかったのだ。

種々の競争の中でわれわれは生きていかざるを得ない。とくにインターネットの普及により便利になったとともに、時間や場所にかかわらず仕事をする場面が増えた。しかし、そういった日々を追われる中でも、初心の感動と決意を確認しながら、前向きに美しい光を求めるような生き方を意識したいものである。これから社会に向かう人たちにメッセージを送るとすれば、感動する心をしばませずに、素直な心で次世代にも感動を引き継いでほしいと願う。